

わたしは今、日本で宣教司祭として働いていますが、「宣教」という言葉を聞く度、いつも頭に、ある二つの話が浮かんできます。その一つは、昔ある先輩の神父様から言われた、「宣教司祭としてしっかりと生きるためには、自分がいるその地域で、自分が葬られることを覚悟しなければならない。」という言葉です。そして、もう一つは、二俣川教会で働いた李神父様から言われた、「日本で宣教するためには、日本と日本人を愛さなければならない。」という言葉です。この二つの言葉をそれぞれ聞いた時のわたしの気持ちは、「そうかな」という印象でした。

「そうかな」という思いは、その頃感じていた、「宣教」という活動は私には合わないものという気持ちを、それとなく表現していたのでしょう。でも今は、「そうかな」という気持ちから、「なるほど、そうだな」という気持ちに変わっています。

「なるほど、そうだな」と思うのは、「やはりそういう姿勢でないと、宣教司祭として生きるのは大変難しいのではないか。」と強く同意するからです。さらに一歩進んで言うと、自分の宣教地域とその地域の人々を愛することや、その地域で葬られる覚悟を持って生きることも、実は、自分自身をイエス様に任せなければならないことではないかと思えます。

今日の福音で、イエス様は別の七十二人を任命し、ご自分が行くつもりの町や村へ二人ずつ送られました。その際、イエス様は色々厳しいことを指示されましたが、これらの指示は、これからはすべてのことをイエス様に任せなければならないということを示しているのです。そのイエス様の指示によると、彼らにはお金を入れる財布や、まんいちばあいかんがひつようものじゅんびいぶくろはきものゆる万が一の場合を考えて必要な物を準備して入れる袋、しかも、履物まで許されませ

んでした。彼らはまるで、物乞いのようにならなければならなかったのです。それに  
 加えて、彼らは途中で誰かに挨拶さえしてはいけませんでした。それは、彼らに任せ  
 られた任務の大事さを表すことで、挨拶する暇もないほど、その任務はすばやく果  
 たされなければならなかったのです。その任務とは何でしょうか。それは病人をい  
 やすことと、「神様の国はあなたがたに近づいた。」ということを宣べ伝えることで  
 した。世の中の人たちの目には、その任務はとんでもない任務のように見えるかもし  
 れませんが、その任務を果たすために選ばれた人々にとって、それは決して軽んじて  
 はいけない、一番大切な任務に違いありません。イエス様の厳しい指示は、その事実、  
 つまり、「彼らとその任務のために選ばれた人である。」という使命を忘れないよう  
 にするためのことだったでしょう。その任務はイエス様ご自分の任務で、イエス様は  
 人々の中におられる神様として来られ、様々な教えやしるしを通して、神様の慈し  
 みと愛を証しされました。さらに、十字架上でそれを最もはっきりと示してくださ  
 ったのです。そして、今日の福音で、イエス様はご自分のその大事な任務を七十二人  
 の弟子たちに任せてくださったわけです。

その任務に招かれた人として、弟子たちには先ほどの厳しい指示と共に、二つの  
 大切な務めを指示されました。それは収穫の主「働き手を送ってくださるよう  
 と願うことと、どこかの家に入ったら、まず、「この家に平和があるように」と言う  
 ことでした。言い換えれば、彼らは自分たちと共に平和のために働く人たちを、  
 神様ご自身が増やしてくださるようお願いしつつ、平和のための働き手としてのアイ  
 デンティティを忘れてはならないということです。実にイエス様は、神様の慈しみ

と愛による救いの御業を、十字架上の死によって全うされ、様々な悪に染まってい  
 る世の中に、真の平和を示してくださいました。イエス様の十字架によって、色々な  
 理由で恨みと憎しみ、妬みと争いに満ちていたエルサレムは、今日の第一朗読に書  
 いてある通り、愛と慈しみ深い母親のようになり、すべての人がその十字架から、  
 恵みと喜び、愛と慰めを得るようになったのです。こうして、イエス様の十字架は、  
 人種や民族、国籍や地域を始め、あらゆる条件による差別を超えて、真の愛と平和  
 のしるしとなりました。今日の第二朗読で、使徒パウロはその十字架が自分にとって、  
 誇りであると公に宣言しました。その十字架によって、異邦人にも神様の慈しみ  
 と愛が恵まれたことを確信していたパウロにとって、その十字架が誇りだと思っ  
 たあたり前だったでしょう。そして、わたしたちもその愛と平和のために働く働き手  
 として招かれています。

今日の福音には、その働き手となっている人々の姿について、とても大事なこと  
 が書いてあります。今日の福音で、イエス様は七十二人の弟子たちに次のようにおっ  
 しゃいました。「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込  
 むようなものだ。」と。この御言葉は、まるで「あなたがたは小羊とならなければな  
 らない。」という風に聞こえます。わたしたちは神の小羊として、ご自分の命を捧  
 げてくださったイエス様のような小羊となるために、このミサに集められ、イエス様  
 の御体をいただいているわけです。そして、小羊としてそれぞれの生活の現場に送  
 られるのです。でも、小羊だと思って教会に集め、また、送ったのに、教会の中  
 も外でも、狼よりはるかに怖い者のように振る舞ったら、それは大変なことになる

でしょう。みんなが、イエス様さまの御体おんからだに養やしなわれて、もっと優しい小羊こひつじ、もっと愛あいに満みちた小羊こひつじとならなければならないと思います。それこそが、教会きょうかいと世よの中で奉仕ほうしするようにと召めされた、わたしたちの真しんの姿すがたに違いありません。そして、その姿すがたを見た多くの人たちにも、イエス様さまの福音ふくいんが宣のべ伝つたえられるはずです。

宣教司祭せんきょうしさいは自分じぶんの地域ちいきとそこの人々ひとびとを愛あいし、自分じぶんもそこに葬ほうむられることを望のぞまなければならない、それは、すべての人ひとを愛あいし、その愛あいで命いのちをささげられたイエス様さまのようにならなければならないという意味いみでしょう。司祭しさいのわたしだけでなく、みんながそうなれるよう、お祈りいのいたします。